

アイヌ
叙事詩

ユーカラ集
IV



アイヌ
叙事詩

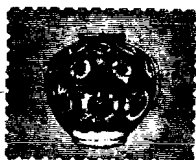
ユーカラ集Ⅳ

“KEMKA KARIP”
(朱の輪)

金成まつ筆録
金田一京助訳注

三省堂

N. D. C. 分類番号	8 1 9	前 付	4 ページ
筆 録 者	かん なり 金 成 ま つ	本 文	375 ページ
訳 注 者	きん だ い けい すけ 金 田 一 京 助	後 付	1 ページ
筆録者略歴	金 成 ま つ 明治8年11月10日生まれ。18歳より24歳まで函館聖公会伝道学校に在学。卒業後52歳までキリスト教の伝道婦として働いた。68歳後(昭和3年)ユーカラの筆録に従事して現在におよび昭和31年11月3日紫綬褒章を賜わった。昭和36年4月6日没。享年86歳。		
訳注者略歴	金田一京助 明治15年5月5日生まれ。明治40年東京大学言語学科卒業。東京大学教授として「アイヌ語学」「アイヌ文学」等担当。昭和18年停年退官。その後も国学院大学教授として、言語学・国語学を講ず。昭和29年11月3日文化勲章を賜わる。日本学士院会員。文学博士。国学院大学日本文化研究所研究審議委員。主著 アイヌ叙事詩ユーカラの研究2冊。金田一選集3冊。		
本文内容	シヌタプカ彦が、美貌の故に、低天を領する狼神の妹に思われて夫婦となり、一鷹のヒーローの小シヌタプカ彦と、妹の朱の輪姫が生まれる。戦いは朱の輪姫が復讐する石狩村にはじまって、オヤルル村に終り、敵中のオヤルル姫がヒーローの思い人となり、村へ凱旋する。		



アイヌ 叙事詩 ユーカラ集 IV

KEMKA KARIP

朱 の 輪

定 価 1500 円

昭和 39 年 8 月 25 日 初版発行

©
 著作権者 国学院大学日本文化研究所
 筆 録 者 金 成 ま つ
 訳 注 者 金 田 一 京 助
 発 行 者 株式会社 三 省 堂
 代表者 小 倉 正 風
 東 京 都 三 鷹 市 上 連 雀 990
 印 刷 者 株式 三省堂三鷹工場
 代表者 小 倉 正 風

東 京 都 千 代 田 区 神 田 神 保 町 1 の 1
 発 行 所 株式会社 三 省 堂
 電話東京 (291) 1126 代表
 振 替 口 座 東 京 54300

組版・三省堂 製本・牧

(ユーカラ IV)

序

金成マツ（イメカヌ）刀自が、私のために筆録されたユーカラ七十余冊は、到底、私一人の力では訳しきれないので、後半を知里真志保君へ送って、東京と札幌とで、同時に訳註の仕事にとりかゝった。そのとき、知里君から、自分の所に伯母の書いた「朱の輪」があるから、まず、これの訳にとりかゝりたいと申し越された。「朱の輪」なら、私の所にもあるから、「それでは、私の所の「朱の輪」を、ご参考にお送りします」と送って上げたことだった。知里君急逝されるので驚いて駈けつけてみると、まだ一行も訳して居られなかった。それで私が、知里君のために書かれた「朱の輪」をもいっしょに持って帰京して、そして知里君に代って「朱の輪」の訳をしたわけである。

実は、「朱の輪」は、イメカヌさんの七十余冊のユーカラ集中、第一に書かれたユーカラだったのである。これを知里君へ送ったために、私は第二のユーカラを先に出版した。今この第一冊、第二冊と訳しながら、時々知里君への「朱の輪」を参考するのに文面の疑問の所を正すのにはあまり役に立たないのに驚いた。文章がちがうからである。

十年も経って書くと、同一ユーカラも、こんなにちがうものだったか。と驚かれるが、それでも筋書が全然同じであるから、やはり同じユーカラにちがいないのである。

こうして、たまたま「朱の輪」を見ただけだが、あとまだ知里君の許にも、イメカヌさんは、悠々、故郷の家で五十冊書いているのである。北大には、アイヌ語をやる後継がいらないからそのまゝおくのも勿体ないゆえ、私が、若し見ることが出来たら、どんなことが発見されるであろうか。

ともあれ、事実をして、事実たらしめよ。この真相を直視して、また

となし眞実を明らかにする、これが第一冊であるのである。

私も昨年の五月五日で満八十歳の老境に入って何としても物覚えがわるくなったのに、世間の用事が、あとからあとからつゞくので、はかどらない所を、横山恵子さんが、第一巻以来私を助けるにかわらない熱心と誠実と、才能とをもってされて、どうやらこゝまで漕ぎつけられた。

また喜ばしいことは、故知里眞志保博士の実兄の高央君が、天分の語学的才能を、あげてアイヌ語学に集注して、おかあさんの知里ナミ刀自に代って私に助力を惜しまれない厚誼である。

今一人、日高は新平賀というユーカラ淵藪の地に、巨豪サンゲレキの養女として育ち、七歳から、ユーカラを演じて翁たちを驚かした平賀サダモ刀自、今尚六十八歳で、日本語にも、堪能、アイヌユーカラに至っては、現代随一の折紙つきで私のユーカラ集第四巻以来数々の示唆を与えてくれたことを深く感謝する。

目 次

序

解 題	1
梗 概	7
KEMKA KARIP	35
I 発 端	37
II 朱の輪	47
III 朱の輪姫	73
IV 石狩村の戦い	126
V オヤルル村	196
VI 決 闘	253
VII オヤルル姫	308
索 引	363

解題

カリ (kari)「回る」, カリプ (karip)「回る・物」は、「円」「輪」をも意味する。

アイヌの男児の輪投げ遊びに、カリプ・パシテ (karip pashte) というものがあつた。パシテは「走らせる」意味で、輪を投げて地上を強くころばしてやることを言う。即ちこの遊びは、数人ずつ両方に別れて交互に一つの輪を投げ、投げられて地上を回転して来る輪を、棒をもって横から刺し貫いて受け留め得た位置から、受け留めたものが投げてやる。敵も棒をもって受け留めて、そこから投げかえす。こうして受け留めかねて輪を転々として陣中深く回転された方が負けとなる。

私の見たのは、明治四十年の夏、樺太東岸のオチョポッカ（後の落帆村）滞在中のことだった。

この輪投げ遊びが我々に連想させるものは、あの円板投げである。古代の武器の円板は、刃がついていて、敵にあたると、触れるものを殺傷する恐ろしい武器だったように想像させる。

アイヌの輪投げ遊びを連想させるこの円い輪の恐ろしい武器がしばしばユーカラに物語られる。このユーカラもその一つである。

ケムカ・カリプ Kemka karip「血染の輪」あるいは「血の輪」ともいう恐ろしい武器が名になっているこの一篇のユーカラは、金成マツ刀自のおはこの一篇だったそう。私へも、甥の真志保君へも最初に書いてくれたユーカラが、ケムカ・カリプだったことが、それでうなずける。

訳名、「血染の輪」「血の輪」「^{あけ}朱の輪」など色々と呼ばれるが、本篇では、これが美女の名にもなってさえいるから、やさしく「朱の輪」ぐらいにして置いた。

いづれにしても、奇怪な着想であつて、到底我々には想像もできないことがらではあるが、不思議と、この篇では、懇ろな愛情が若いヒーローとヒロインとの相抱いて眠るところまで長々と細かく謡われ、綿々の

情が、メノコ・ユウカラ（婦人ユウカラ）を想わせるほどであるのは、伝承者その人自身が婦人だからでもあろうか。

「朱の輪」は、知里君がまず第一にこれを訳出する約束だったが、まだ一枚も訳さずに他界されたので私が訳出することになって、二人のノートを比較して見て驚いた。実に驚いた。同じ伝承者が同じ題のユウカラを十余年隔てて書いたのである。一は東京の私の家で、一は故郷の自分の家で。そして出来たものを比較して見ると、発端はほぼ同じであるが、あとは自由に書き流されて、事がらは大体同じであるが、文章は一々同じにならず、ゆっくり伸び伸びと書かれていて、ちっとも字句にこだわらない。だから、すっかり意味のわかる人にとっては同じユウカラとすぐわかるけれど、少しも意味がわからず字形だけを見る人には全く別な記録のように思われるであろう程ちがうのである。

一代前の古老たちの伝承では、こうはちがわなかったようで、あの頃は、個人的要素の加わるものは、「あれはちがう」と排斥されるものだった。同じ物語の筋を、イメカヌさんはゆったり心に浮べて、創作をしているような気持ちで書かれるものにちがいない。だから、書くことが、機械的なことではなくして、作品を仕上げるような楽しみをもって書かれるから、それで、私へ書いたと同じ物をまた書く気にもなれるのだだろう。こんどは、ゆっくり、自宅で、心のままに紙に向って。だから、書くことは、ある程度作家が作をするような喜びで書けたはずと思う。

私へ書いた「朱の輪」を(甲)、知里君に書いた「朱の輪」を(乙)という、甲では言い足りない所を、乙では、行き届いていて、よくわかるように、書けていることがしばしばある。例えば

最初の石狩へ朱の輪の現れる様子が 乙 ではこう叙述される。

曰わく――

Ishkara kotan
石狩 郷

kimun nupka wa
山の 野原 から

pet esoro peka
川に添うて下の方に

kemka karip
朱の輪が

pash wa san
走りて下る

aukohaitahaita
皆々はずしはずす

hontomota sui
たもまち また

pen nutap ta
上の平野に

pash wa oman.
走って行く

甲に「今はじめて、母というものを我見たのだから、首領の子勇者の子で、我はあれど、数多の声なき涙、数多くの声なき涙が、我が顔を流れる。」とある所を、乙では、

「もう少しで、「おっ母さん！」と叫んで、胸へでも抱きつき、つかまろうとしたけれど、しのび堪えて、地へ建った柱の如く、みずからをしっかりして、我が肝のかしらから、我が肝の末から、立ちのぼる息の孔が我に塞がる如く、我が目尻、共に湿い、勇者の裔首領の裔で我あるけれど、女子の如く小児の如く、我が顔の面を流れ下る涙が、雨のようだ。」とある。

また四段の半ば、石狩戦のたゞ中へ突如育ての姉が来合わせる所にも、乙では、「弟ぎみが、どこへ行かれたやら、わからず、心配してると、石狩の郷に事件がある噂を聞いたが、はっきりわからず、泣いてばかりいたが、石狩のいくさは、ただならず神がかって来て弟ぎみの憑き神の音のように覚え、まだおんぶする程の子どもなのにと心配でやって来た。」と説明があるなど、どうもこの方が整っている。

私は、これまでユーカラの亡びる一歩手前の現状をば伝承文学が創作文学に入り替る一歩前に、生活の激変のために、そうならずに亡びてしまふ現状だと報告していた。だから、金成イメカヌさんでも、一語一句、祖先の伝えをその通り伝える人の例に思っていたのであったが、故、幸恵さんの時々の談話に、祖母の^{フチ}と養母の^{おつかさん}とでは、古典的なと今様なとの相違があるというようなことを聞かされていたことを、かような意

味でも言っていたものだったかと想起される。ただ口語が混入したり訛音が生じていること以上に。

即ち、生活の激変が、今少しおくれたら、伝承文学から創作文学へ、そして専門的な、創作詩人の独創的個性的作品が生まれようも知れなかった、そこまで行きかけてまだ行かなかった、丁度それを代表する人が、この金成イメカヌさんだったことが、この「朱の輪」の甲乙を比較することによって実感されるのである。

そういう意味でも金成刀自の自筆のユーカラは新しい今一つの興味を有するものであることが感ぜられる。

梗概

第一段 発 端

育ての姉、大きな家の奥深く、又なき養育を我に施して、いつも变りなく暮らしていた。

我が住む家の美しさ、梁の下ぎっしりつまる家宝、こがねの^{ほかい}行器、こがねの手筐^{なみ}、並の行器、並の手筐が打ち交り、上の方には首領の佩刀の、あまたの房がゆらゆらし、宝器の光、宝刀の光に、屋内が明るくかゞや^やく、云々。それから着衣の立派さを、肩から垂れる鈴が、腰に達し、腰から垂れる鈴は、裾に達する云々、育ての姉は毎日裁縫に没頭し、自分は刀の鞘の彫刻に夢中になっていたこと。など細々と叙しておわる。本篇では、護り刀の鞘の上の彫刻を事細かに述べる。(一) 口元には雌雄の龍神(雷神)の雄神が角を高々と振り立て、雌神は雄神と顎をさし交わしてのたうち、(二) 鞘の中程には、狼の神が、金毛をぴかぴかさせ、(三) 鞘の末には、夏山狐の体毛の抜けた異相、それを誇張して裸皮の皺が、数数の横木(早切^{ききり})を並べた様、などと述べる。

ヒーローの護り刀にこの神獣の彫刻のあること、そして、この彫刻の神獣が、ヒーローのために時あって生動してヒーローを助けることが、よくある筋で、日高では、そういう筋が、最も著名な「虎杖丸」の筋であって、そのためこの曲の一名「変怪の憑依、怪物の憑依」となっている。金成刀自のユーカラでは、この護り刀の特称の名は見えないが、この彫刻のことは、屢々見えて、それに^ば化けて人々を驚かせるヒーローの軽い悪戯の段などが見える。この「朱の輪」の曲もその一つであること本文に見える通りである。

第二段 朱 の 輪

ある日のこと、世間の取沙汰に――

石狩の郷の後方に、時々真赤な投げ輪が飛び回る。石狩彦が、それを見て、こういう触れを出した――

「誰でもあれ、この朱^{あけ}の輪^わを刺し止めるものがあつたら、私の財産を半分ほど背^せ負^おわせて、妹を嫁に進ぜよう！」

これを聞いて遠近の若者達、我も我もと石狩へ駈けつけて、小屋掛けをして、寝泊りをして毎日競争をしては、衝きつ、刺されつして幾人もが死霊となって昇天するという。世間の取り沙汰。

これを聞いて、「にくい石狩彦、思いあがって苦々しいことをご大層に触れるものだ。石狩姫はまたどんな美人でそのために毎日人々が命をおとすものかな」と腹立たしかったが、育ての姉は『決して決してそんな噂には耳を貸し給うな。』と言って、毎日薪をどっさり採って来て大きな火を焚いて屈んだり起ったりして休みなく要心しているからどうしようもなかった。

忌々しく思つて、いつか、隙を窺つて出かけようとしても、いつもいつも起きて居るので出かけられない。そのうち育ての姉、とうとう眠くなって、こくりこくり、ぐうぐう、やり出した時、我はまた、梁の神が上から見据え、寝床の神が下から我をこずくようで眠れない。

とうとう起き出して我は身まかないのものを身につけて炉縁を伝つて入口へ。簾をそつとあげて戸外へやおら出た。

初めて見る我が家の戸外の景、その有様を詳らかにして、浜へ出る。

それから憑き神へ祈つて音をやめてくれとたのむ。そして出かける。

石狩川がしらじらと見えてくる。石狩の里が山手は林にまじり、浜手は海にさし出て、そのしちに舟がいっぱい着いている。

村の背後の山の上から広い道が下つて来る。その両側に夥しい苦屋^{どまや}の狩小屋が見渡されたが、われは窺かに土中にかくれて見ているが、聞くと見るとでは大ちがいだ。

そのうち誰やらが、『さあ神宝の朱^{あけ}の輪^わが出たぞ。さあ、みんな捕れ

や。』と叫ぶものがあり、その時に、苦屋の上の端に、音に聞こえた当の石狩彦、われより一つ位年上の若者だ。その側に長い顎の直毛をちょんぎった、大きな耳輪をぶらぶらさせた醜い女が坐している。見るだけでうんざりした。

その時空が崩れるほどの音がして上の川端へ何か落ちた。見ると真赤な投輪、太陽のようなのが、落ちるが早く、ぴかぴかぴか。忽ち両側から大勢が争って刺すけれども、お互を刺し殺して数々の死霊の立ち昇る音が鳴りとどろく。それをあざ笑う声がまたどっと起こる。石狩彦と石狩姫も共に笑いかわす。憎いやつめらと我憤る。

赤い輪が飛んで来てぴかぴか光りながら、我が前を烈風の如く通る時、力声と共に、土煙を立てて赤輪をつかまえ、力をこめる、自分の天上、轟と音がした、そのみをよき夢のこゝちに覚えてそのあとはわからなくなってしまった。

第三段 朱の輪姫

死んだのか、眠ったのか、うつらうつら、さんざんそうやって我に返った時には、大きな家の奥に目がさめた。

炉の上の座に仰向きに我は寝ていた。火が燃えていた。

暫くすると、右座に小さいもやの小山、もやを散らしてよく見ると、まだ若い乙女の肩の上から頭上に、巫女のしるしの憑き神の虹が見えたが、頭を低く坐へつけて、涙に濡れて居た。

気がついたが、わざと眠っている振りをしていると、女め、前髪の毛を左右に分けて我が方へ振り向く、その顔の光で家の中が明るくなる。今まで姉を美しいと思っていたに驚くべき美女、今年あたり女ごろもを初めて身につけた様子、褒め詞もない美女、久しい間泣いていたらしい睫毛をして、まともに顔もあげずに視線を伏せていたが、やがて